

多文化共生通信

海外教師研修 研修メンバー 押田 聖史

テーマ：学校と多文化共生

対象：教員

テーマ設定の理由：

昨今、日本でも教育現場や日常生活において「多様性」という言葉をよく耳にするようになった。同時に、学校では「校則を守る」ことを生徒に義務付け、教員もそれを指導する体制にある。私自身、「個の尊重」と「生徒指導」とのジレンマに悩まされる場面が多々あり、これを解決するヒントを得たいと思っていた。そこで、様々な文化や民族が入り混じって成立している多文化共生国家、ブラジルの学校を実際に視察することで、そのルールや雰囲気を日本に持ち帰り、「個の尊重」と「生徒指導」に生かすことが出来るのではないかと考えた。

ブラジルの学校について：

私たちが視察した学校、教育機関は3か所。1か所目は「エコス学園」。私立の学校で、学費は日本円で月7万円程度。ブラジルの中では比較的富裕層の家庭の子が通う。

現勤務校（厚木王子高校）との一番大きな違いは、校則が存在せず、校則の掲示が存在しない。ルールは子どもたちが決めているそうである。教師と生徒とでコミュニケーションを密にとり、生徒の意思を最大限に尊重することで、生徒がのびのび学校生活を送っている印象を受けた。どの学年の児童生徒も英語が通じたため、私もコミュニケーションをとることができた。



日本との繋がりを大切にしている学校でもあり、教材には日本の動物（写真右）を題材にした教科書を使用していた。

2か所目は「LFC」。貧困層の子どもたちをストリートチルドレンにしないための教育施設。子どもたちだけでなく、老人や障がい者への職業訓練もおこなう施設である。ここでも校則の掲示物等が存在せず具体的な学校のルールが分かるものが無かった。この子どもたち、職員は英語がほとんど通じなかった。ここに教育の格差を感じた。



ブラジルの童話に出てくる妖精を工作する授業。材料は段ボールのような紙や紙コップなど、安価なものが使用されている。

3か所目は「major arcy」。公立高校で、学力は中堅レベル。主に市から支給されたタブレットを使用し授業が行われている。日本の公立高校との大きな違いは、またしても校則の掲示がないこと。生徒の中には先生の目を盗んでスマホを使用し授業とは関係ないことをしている生徒も複数おり、何故「No cellphone in the class」のルールを作らないのか、疑問が残った（勤務校では発見し次第、没収指導をしているためである）。また、教員側の授業の進捗状況がタブレットを通じて市に管理されていることにも驚いた。生徒へのルールは甘く、教員へのルールは厳しい？印象を受けた。

以上、3か所の教育施設を視察した。どの学校、施設も生徒はのびのびと学校生活を送っている印象をうけた。また、私たちが投げかける問いに対し、クラスの大半の子たちが積極的に答えようとしてくれるところが、自己発信が控えめな日本の児童・生徒（特に日本の高校生）とは大きく異なる印象をうけた。



←major arcy の地理の授業。授業風景は日本の高校とあまり変わらないが、問いへの反応は多くの生徒が積極的である。

先生方と一緒に考えたいこと：

今回の視察で、ごく一部ではあるが、多文化共生国家ブラジルと日本の教育の違いを感じることが出来た。中でも、ブラジルのような「個を尊重する」ことに重きを置くことと、日本の公立高校のような「規律を守る」ことを大切にするルール、「空気を読む」という雰囲気の妥協点を考えたいと思った。例えば、日本の生徒指導提要には、「背景や文化の違いを理解し尊重する」とあり、「特に多文化社会では、生徒の文化的背景や価値観が異なることが多いです。教育現場で個を尊重するとは、それらの違いを理解し、否定せずに価値あるものとして認識することです。」とあるが、生徒の文化的背景の一つとして、ピアス等の装飾品や染髪等の頭髮の加工（本校では校則で禁止されている）を許可するべきかどうか。生徒の家庭が持つ宗教的理由、価値観の違い（他人と競争することを良しとしない）から体育や体育祭をはじめとする学校行事に出られない生徒の成績をはじめとする対応等、「個の尊重」と「規律を守る」ことへのバランスのとり方を、先生方と一緒に考えていきたい。